



鎌ヶ谷市

郷土資料館だより



第73号



○大人の歴史ワークショップ開催報告……………1
○郷土資料館この一品③……………2・3

○郷土資料館セミナー参加者募集中……………2
○史料整理の現場から②……………4

「大人の歴史ワークショップ」開催しました まが玉づくりに挑戦！

郷土資料館では「大人の歴史ワークショップ」を11月9日に開催しました。

今年のテーマは、夏休み子ども教室でも大人気のまが玉づくり。「こんな企画を待ってました！」と、子ども教室を羨ましく思っていた16名が満を持して参加しました。

参加者の皆さんはオーソドックスな形から装飾のついた複雑な形まで、個性あふれる世界に一つだけのまが玉を作り、昔の人たちの生活を肌で体験することができました。

大人の歴史ワークショップは来年度も計画しています。どんな企画を行うかお楽しみに！



楽しかった！…完成したまが玉を胸に



石に型紙でまが玉の形を写します



棒なども使って無心で磨きます。完成も間近です



16名の皆さんが挑戦しました



理想の形を目指して一心不乱に石を削ります

郷土資料館セミナーを開催 テーマは「地理的資料で見る房総」

房総ってどんなところ？どんな歴史があるの？どんなおもしろいところがあるの？

今年度の資料館セミナーでは、絵図などの地理的資料から房総を紐解きます。

いつもとはちょっと違った視点で房総を眺めてみませんか？

期日・内容・講師 ①12月5日(金)「おもしろ半島ちばの地理的特色」石毛一郎さん(県立成田国際高校教諭) ②12月21日(日)『下総之国図』作製 平野明夫さん(國學院大學兼任講



前回の郷土資料館セミナーで

師) ③1月18日(日)「旅の歴史と地誌で巡る房総の名所」本市学芸員 ④2月1日(日)「鎌ケ谷市域に残る近世村絵図」本市学芸員

時間 いずれも午後2時～4時

場所 ①～③＝まなびいプラザ

④＝中央公民館

定員 50人(申込先着順)

申し込み 郷土資料館 ☎445-1030

昔の暮らし体験してみよう！ 子どもワークショップを開催

ちょっと昔の鎌ケ谷はどんな様子だったのだろうか？そして、どんな暮らしをしていたのだろうか？この「子どもワークショップ」では、昔の写真を見て鎌ケ谷の様子を感じてもらうとともに、「火のしアイロン」などの道具を実際に使ってもらうことで、昔の暮らしを体験してもらいます。

対象 小学生～中学生(保護者同伴可)

日時 2月21日(土) ①10時30分～正午

②14時～15時30分

場所 郷土資料館

定員 各回15人(申込先着順)

郷土資料館
この一品 31

火のし・炭火アイロン

火のし・炭火アイロンは変わってきた身近な道具の一例として学校の授業などでもよく取り上げられています。

出前授業などでもこれらの道具は、皆さんよく知っていて反応がいい資料の一つです。

電気が広く普及する以前は、熱源や明かりは火に依るところが多く、木などを燃やして明かりや暖を取ったり、長く明かりとして使う上では、ろうそくや油などを燃料として燃やしたり、木材などを炭にして、長く熱源と

して利用することが考えられました。

今回紹介する火のし・炭火アイロンは、熱源が変わってきた道具の一つです。

現代ではスイッチ一つで、電気により機器のこて(こて)の表面が温まり、その熱で時には蒸気を交えて衣類などのシワを伸ばす作業を行うことができます。

火のしはアイロンの初原型で、柄杓(ひしゃく)のような形をしており、鉄で作られた器部分と熱が伝導しにくい木の柄からなる道具です。器部分の底部に熱した炭を入れて、十分に熱が行き渡ったところで底部を布や衣類に押し当てシワを伸ばしたり、折り目をしっかり付けたりします。なお、器部分は厚みもあり適度な重さもあります。



前回の子どもワークショップで

参加費 50 円 (保険料)

申し込み 2 月 3 日 (火) から郷土資料館

☎ 445-1030

郷土資料館ボランティアが
鎌ヶ谷の縄文土器を紹介
＝鎌ヶ谷市民まつりで＝

10 月 11 日に開催された鎌ヶ谷市民まつりに、今年も郷土資料館ボランティアの皆さんが「鎌ヶ谷の歴史と文化財 PR ブース」を出展しました。

令和 7 年度第 2 回 歴史講演会 (予告)



今年度の第 2 回歴史講演会は、郷土資料館セミナーに続き地理学の分野から、歴史地理学の先生をお招きして 2 月上旬に開催を予定しています。

詳細については、広報 1 月 15 日号に掲載予定です。続報をお待ちください。

PR ブースでは、市内の遺跡から出土した土器の写真パネルの展示をはじめ、土器の模様を写し取る拓本を体験してもらったりと、子どもから大人まで楽しんでいただきました。

たくさんのご来場ありがとうございました。



土器の模様を写し取る拓本コーナーは大人気



火のし(左)と炭火アイロン(右)

底部は滑らかですが、凸レンズのように、少し丸味をもって膨らんでおり、対象物にしっかり当たってスムーズに動くように作られています。

江戸時代の絵にも火のしを使う様子が描かれているものもあります。

明治時代になると海外から入ってきた炭火アイロンが徐々に主体となりますが、火のしも昭和初期ごろまでは使われていたようです。

炭火アイロンは、今のアイロンと同じ船形の形状をしており、火のし同様の鉄製で、適度な重さがあり、熱と重さでシワを伸ばすなどの機能は同じです。取っ手の付いた上部から炭を入れることができ、先端には煙拔きの煙突や、後部には火力を調節できる通気口が付いています。電気式が普及する昭和 30 年代まで使われていたようですが、形状はそのまま電気式にも継承されました。

史料整理の現場から22 陸軍特攻隊員の腕章

郷土資料館では、昨年の『広報かまがや』8月15日号において、終戦80年展示に向けた戦争と軍隊に関する資料提供の呼びかけを行いました。これをきっかけに昨年度ご寄贈いただいた資料などを、今夏に開催した第30回ミニ展示にひき続き、現在開催中の新資料展においても展示しています。本号では新資料展の展示資料から、太平洋戦争末期の昭和20年（1945）、第272振武隊員が身に着けていた、日の丸の腕章についてご紹介します。

振武隊は、昭和20年3月26日から始まった沖縄戦（天号作戦）における、陸軍第6航空軍隷下の特別攻撃隊（特攻隊）の総称です。沖縄戦終結後は本土決戦（決号作戦）に転用され、出撃した特攻隊と、各地で待機中の特攻隊をあわせ、終戦までに463を数える振武隊が編成されました。特別攻撃（特攻）とは、敵艦船や航空機に対する体当たり攻撃を意味し、航空機や特殊潜航艇による組織的な特攻作戦は、19年10月にフィリピン方面で実施された海軍の神風特攻隊以降、陸・海軍ともに繰り返し行われました。このうち、航空機特攻の乗員の多くは、海軍が学徒出陣による海軍予備学生や飛行予科練習生（予科練）出身者、陸軍は学徒出陣の特別操縦見習士官出身者か少年飛行兵出身者でしたが、民間航空機の乗員養成を目的とした航空機乗員養成所出身者も含まれていました。

この腕章を身に着けていた方は陸軍少年飛行兵の出身で、昭和20年5月初旬に第272振武隊に転属後、機上通信に従事し、終戦までの3ヵ月余の間、群馬県の館林飛行場（現館林市・



軍服の両袖に付けられていた日の丸の腕章

（おうら 邑楽町）で特攻訓練を行っていましたが、出撃することなく終戦を迎えました。

腕章は寄贈いただいた当初、「恩賜の腕章」と手書きされた紙片と、「任務完遂ノ為ニハ……」「必沈ノ為ニハ……」の文言が印刷された切り抜きと共に台紙に貼付されていました（写真）。腕章はほぼ剥離した状態であったため、現在は台紙と別々に保管）。台紙に「恩賜」とあるのは、腕章が明治天皇の御衣で作られたことによります。また、切り抜きは、昭和20年5月に作成された「と号空中勤務必携」を活字化した資料の複写から、「と号部隊ノ本領」に続く部分を抜粋したものです。「と号」は「特攻」の略号で、陸軍の航空機による艦船に対する特攻隊の総称を「と号部隊」といい、この資料は、昭和20年4月以降、本土決戦に備え各地で編成された、陸軍特攻隊要員に対して配られた教本の一つと考えられます。極秘扱いとされ、同種の教本が終戦時に返却されていることなどから、原本はほとんど残っていないと思われますが、戦後研究者の手により活字化されています。特攻隊生存者の方々の間でこうした情報を共有し、腕章が大切に保管されていたことがうかがえます。

新資料展では、腕章とともにご寄贈いただいた、写真などの資料も展示しています。あわせてご覧ください。

鎌ヶ谷市郷土資料館だより 第73号 令和7年12月1日発行 編集・発行：鎌ヶ谷市郷土資料館

住所：〒273-0124 鎌ヶ谷市中央1-8-31 電話：047-445-1030

メール：kyodo@city.kamagaya.chiba.jp F A X：047-443-4502

ウェブサイト：http://www.city.kamagaya.chiba.jp/sisetsu/kyoudoshiryokan/index.html

